

利用されているTBアーカイブ資料(1)

結核研究所図書室

TBアーカイブ事務局 佐藤 和美

結核予防会TBアーカイブの主な資料は結核予防会本部（ホームページ上の資料を含む）、及び結核研究所図書室に保管されており、外部の方々からの問い合わせや資料閲覧などにも対応してきた。当図書室は、一般には公開されていないが、結核に特化している所蔵内容の特殊性から、外部からの閲覧希望者も多く、事前に許可を取れば閲覧は可能である。

結核研究所内のアーカイブ資料の外部利用者は、記録がある1993年から2021年までで、延べ150名であり、職種内訳は表の通りであった。

表. 利用者の職種 (1993年～2021年)

学生（大学生・大学院生等）	63
教員（教授等）	31
医療関係者 （医師・保健師・看護師等）	20
研究員	4
会社員、その他 （個人・役所関係・報道関係等）	30
不明	2
合計	150

利用頻度の高いもの

書籍

書籍で頻度の高いものは、月刊雑誌「療養生活（自然療養社）」第1巻から43巻、1923～1965年（年または半年毎の製本、56冊）が最も希望が多かった。これは1923（大正12）年より発行された結核患者向けの雑誌で、結核回復者の田邊一雄氏が主幹となって、抗結核薬がなかった当時の患者のために、日常の療法の紹介や質疑応答、悩み相談、短歌の投稿等による患者同士の交流等、患者の側に立った療養書である。国立国会図書館にもあるが、そこに所蔵のないものもある。大正、昭和の患者の生活を知る貴重な資料である。

ポスター

次に人気のものは、昔の結核のポスターと紙芝居である。ポスターは、全部で29枚あるが、その中で昭和13年頃発行されたと思われる11枚のポスターは作

者不明であるが、戦前の結核予防の様子がよく表現されているもので利用が多い。戦時下の雰囲気が出ていているものもあるが、インパクトがあって分かり易い（図1）。



図1. 結核のポスター

「私の幸福は健康から：健康の大敵は畜牛結核です」農林省 昭和4年もよく利用される。島尾忠男先生が以前、複十字No.329で紹介されたことにより問い合わせがあり、先日、沖縄県の大学教授が直に見に来られた（このポスターについてはNo.329を参照）。

紙芝居

紙芝居は、「結核裁判」（国民画劇株式会社製作、結核予防会監修、昭和25年、図2）の閲覧希望が多い。閻魔大王が結核菌を裁判にかけ、見事有罪となり、地

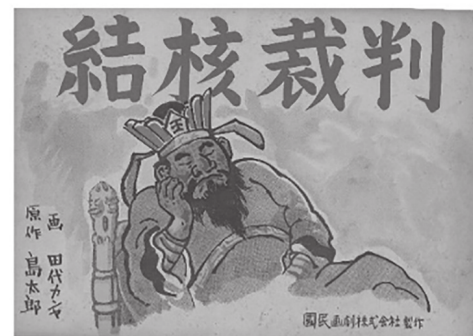


図2. 紙芝居「結核裁判」

獄では集団健診を鬼たちに行うというストーリーである。島尾忠男先生の提案でこの紙芝居の内容は、寸劇として結核予防全国大会でも演じられた。小林典子事業部長が劇のことを複十字No.362で紹介している。

「裏町の太陽」農村漁村文化協会発行、結核予防会推薦、昭和16年に製作された紙芝居も閲覧希望が多

い。これは杏結核資料館*より寄贈をされた。戦前の患者の様子、偏見、保健師の活動等が描かれている（図3）。

DVD



図3. 紙芝居「裏町の太陽」

DVDでは、朝日キネマ合名社製作、日本結核予防協会〔編〕の「人類の敵」1927年。日本結核予防協会編集の「栄光の日は来る」1931年、「結核豫防(仮題)」(出版年不明)。内務省衛生局〔編〕の「結核豫防(MP扱い)」1932年、等がある。この4本は戦前に製作されたフィルムを東京国立近代美術館フィルムセンターにDVDに複製を依頼したものである。「結核豫防(MP扱い)」はアニメーションである。どれも白黒無声映像でセリフの字幕入りである。当時映画は新しい娯楽として多くの人々からの要求があり、結核の啓発活動として、その教育的影響力に注目が集まったという。

最近の利用

最近の利用者でこれらのDVDと本部ホームページで紹介されている結核予防アーカイブシリーズ(映像)等を参考にして、2020年に青山学院大学史学部史学科の学生が卒業論文を書いた。「結核に見る人々の意識」という題で発表し学部優秀賞を得た。結核に興味を持ったのは新型コロナウイルス感染症の影響もあるという。この論文は謝辞を頂き、寄贈されている。

また、4年程前の利用者で、大学院の院生が最近発表された学会誌を送ってきてくださった。「文化資源学」文化資源学会の第19号に「教育映画草創期における日本結核予防協会の映画製作」と題して発表している。中に上記「人類の敵」と「栄光の日は来る」が

取り上げられて、謝辞もいただいた。

寄贈書

このように利用者の中でその成果を発表され、論文や本をお贈りくださる方もいる。勿論TBアーカイブ委員のメンバーである渡部幹夫、福田真人、青木純一氏等はすでに様々な形で資料を利用された論文や著書があり、ご寄贈も頂いている。最近、天理大学文学部国文学国語学科の北川扶生子教授も資料を利用して、「結核がつくる物語：感染と読者の近代」2021年を著され、寄贈された。薬のなかった時代の患者の生活がいかに過酷なものであったか、無名の人たちのとぎれとぎれの声を取り上げ、厳しい状況の中でどのように生き延びていったのかを検証するためには、患者側に立った貴重な本である。あとがきにあるように「感染症は、私たちの社会のありようを映し出す鏡です。」とはまさにこの新型コロナウイルス感染症の現代にもあてはまる。

<閑話休題> 他館に所蔵があまりないものとしてロシア語の雑誌の問い合わせがあった。「レントゲン学・放射線紀要」である(ロシア語の原題は省略)。ヒロシマ、ナガサキ、ビキニの大量の被爆資料を持ち帰ったと言われている、ソ連女性医学者アンナ・コズローヴァの伝記データがこの雑誌に出ていないかを見たい、とのことであった。初めにロシアからメールが来たが、この研究者がロシア滞在中に探せず、当室に問い合わせてきた。この雑誌は語学に堪能だった島尾忠男先生が推奨されたものであった。

上記のようにTBアーカイブ資料は様々な人に利用されており、その管理・保存の重要性が感じられる。



注*大阪府寝屋川市に、小松良夫医師が自ら集められた結核を含む医療に関する書籍1万冊以上を、2001年に自身の病院の敷地に資料館を建て公開された。2004年に同氏の逝去後、資料の殆ど全てが当室に寄贈された(詳しくは複十字No.277, 339参照。No.339には、この紙芝居のことについても紹介されている)。

(TBアーカイブ問い合わせ先：メールlibrit@jata.or.jp、電話042-493-5645)